
でばすかー

不足茶野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ではすかー

【Nコード】

N1857B

【作者名】

不足茶野

【あらすじ】

樹海で死のうとした僕。そこへ迷い込んできた変な女の子、琴和リン。ホント、うるさくて馬鹿なヤツ。しかたないから樹海の外まで送ってあげることにした。

「それなりに太い木の枝に縄をくくりつける。
なぜか近くにあった手ごろな箱を見つける。きつと以前いた人が
使ったものだろう。」

台の上に登り、目の前の縄でできた輪を見つめる。

——ああ、これで逝ける——

ここはとある樹海。

僕は自殺しようとしていた。

それはなぜだろう？ 人生に疲れた？ 漠然とした不安？
理由なんかどうでもいい。どうせ死ぬんだから。

僕は縄に手をかけた。

「もーーーーっ!!」

な、なんだこの声は!?

さらに近くの草むらが揺る。

他にも誰か死にたい人間がいるのか!?

僕は瞬間的にそこへ目を向けた。

「ここドコだかわかんないあああ!!」

訳の分からん叫び声とともに草むらから飛び出てきたのは、小柄
な女の子だった。

女の子はつんのめるように僕の前まで来ると、こちらを認識した
らしく、中腰の姿勢のままこっちを見る。

そして僕は目があった。

「あつ、オトコがいる」

「は？」

女の子は急に下を向いたかと思うと、次に肩を震わせた。

「ねーっ！！ 助けて！！ リンちゃんこんなところ、お断リン！！」

「何だ？ 何なんだ？」

ものすごい勢いで僕に近づくと目を潤ませすがりついてきた。

僕は気おされてしまい、されるがままに抱きつかれる。

「リンちゃんねー、カレシと車でここまで来たのお、リンちゃんねえー、車からおりてって言われねー、リンちゃん置いてけぼりなのぉ」

「ちよつと待つて。いきなり現れて、そんなに矢継ぎ早に言うなよ」とりあえず僕は女性を引き離そうと両肩を押すがびくともしない。しょうがないので僕は女性の背中を何度も軽くたたいて落ち着かせた。

「ふう」

女の子はわざとらしい声をあげる。

さらに僕にくつつきながら彼女は顔を上げた。

うつ、顔が近いぞ。

まじまじと顔を見る。

「あっ……」

カワイイ…… 不覚にもそう思ってしまう。

わずかに潤ませた大きな瞳や小さく震える唇。

年齢は僕と同じ二十歳前後だろうか？

ツインテールにした髪が風でわずかに揺れている。

それに香水かな？

久し振りに嗅ぐいい匂い…… じゃないだろ！！

僕は死のうとしてたんだぞ。

とりあえず彼女をここから追い払わなければ。

「僕は今から大事な用があるから、悪いけど自力で帰ってくれる？」

これ以上、人と絡むのはゴメンだ。

煩わしいんだよ、何もかもが。

しかし、そんな事とはお構いなしに女の子は吼えた。

「いやー！ー！ー！ー！ー！つ！！！！一人ぼっちちは、さみしいの。お。お。お。つ。つ。！！！！」 そんなの “激” お断リン。つ。つ。つ。つ。！！！！」

! 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100 101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118 119 120 121 122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133 134 135 136 137 138 139 140 141 142 143 144 145 146 147 148 149 150 151 152 153 154 155 156 157 158 159 160 161 162 163 164 165 166 167 168 169 170 171 172 173 174 175 176 177 178 179 180 181 182 183 184 185 186 187 188 189 190 191 192 193 194 195 196 197 198 199 200 201 202 203 204 205 206 207 208 209 210 211 212 213 214 215 216 217 218 219 220 221 222 223 224 225 226 227 228 229 230 231 232 233 234 235 236 237 238 239 240 241 242 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 254 255 256 257 258 259 260 261 262 263 264 265 266 267 268 269 270 271 272 273 274 275 276 277 278 279 280 281 282 283 284 285 286 287 288 289 290 291 292 293 294 295 296 297 298 299 300 301 302 303 304 305 306 307 308 309 310 311 312 313 314 315 316 317 318 319 320 321 322 323 324 325 326 327 328 329 330 331 332 333 334 335 336 337 338 339 340 341 342 343 344 345 346 347 348 349 350 351 352 353 354 355 356 357 358 359 360 361 362 363 364 365 366 367 368 369 370 371 372 373 374 375 376 377 378 379 380 381 382 383 384 385 386 387 388 389 390 391 392 393 394 395 396 397 398 399 400 401 402 403 404 405 406 407 408 409 410 411 412 413 414 415 416 417 418 419 420 421 422 423 424 425 426 427 428 429 430 431 432 433 434 435 436 437 438 439 440 441 442 443 444 445 446 447 448 449 450 451 452 453 454 455 456 457 458 459 460 461 462 463 464 465 466 467 468 469 470 471 472 473 474 475 476 477 478 479 480 481 482 483 484 485 486 487 488 489 490 491 492 493 494 495 496 497 498 499 500 501 502 503 504 505 506 507 508 509 510 511 512 513 514 515 516 517 518 519 520 521 522 523 524 525 526 527 528 529 530 531 532 533 534 535 536 537 538 539 540 541 542 543 544 545 546 547 548 549 550 551 552 553 554 555 556 557 558 559 560 561 562 563 564 565 566 567 568 569 570 571 572 573 574 575 576 577 578 579 580 581 582 583 584 585 586 587 588 589 590 591 592 593 594 595 596 597 598 599 600 601 602 603 604 605 606 607 608 609 610 611 612 613 614 615 616 617 618 619 620 621 622 623 624 625 626 627 628 629 630 631 632 633 634 635 636 637 638 639 640 641 642 643 644 645 646 647 648 649 650 651 652 653 654 655 656 657 658 659 660 661 662 663 664 665 666 667 668 669 670 671 672 673 674 675 676 677 678 679 680 681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713 714 715 716 717 718 719 720 721 722 723 724 725 726 727 728 729 730 731 732 733 734 735 736 737 738 739 740 741 742 743 744 745 746 747 748 749 750 751 752 753 754 755 756 757 758 759 760 761 762 763 764 765 766 767 768 769 770 771 772 773 774 775 776 777 778 779 780 781 782 783 784 785 786 787 788 789 790 791 792 793 794 795 796 797 798 799 800 801 802 803 804 805 806 807 808 809 810 811 812 813 814 815 816 817 818 819 820 821 822 823 824 825 826 827 828 829 830 831 832 833 834 835 836 837 838 839 840 841 842 843 844 845 846 847 848 849 850 851 852 853 854 855 856 857 858 859 860 861 862 863 864 865 866 867 868 869 870 871 872 873 874 875 876 877 878 879 880 881 882 883 884 885 886 887 888 889 890 891 892 893 894 895 896 897 898 899 900 901 902 903 904 905 906 907 908 909 910 911 912 913 914 915 916 917 918 919 920 921 922 923 924 925 926 927 928 929 930 931 932 933 934 935 936 937 938 939 940 941 942 943 944 945 946 947 948 949 950 951 952 953 954 955 956 957 958 959 960 961 962 963 964 965 966 967 968 969 970 971 972 973 974 975 976 977 978 979 980 981 982 983 984 985 986 987 988 989 990 991 992 993 994 995 996 997 998 999 1000 1001 1002 1003 1004 1005 1006 1007 1008 1009 1010 1011 1012 1013 1014 1015 1016 1017 1018 1019 1020 1021 1022 1023 1024 1025 1026 1027 1028 1029 1030 1031 1032 1033 1034 1035 1036 1037 1038 1039 1040

あんまり耳元で言うから耳鳴りがした。

仕方ないので無理やり突き放そうとするが、ガツシリと両腕で僕の胴体はロックされている。

全然離れない。

どうやらこの子に何を言っても無駄みたいだ。

僕はとりあえず彼女を樹海の外に出す事にした。

死ぬのはその後でしょう。

「わかった、わかった。一緒にこの樹海を出てやるから」

「え、本当！？わあい」

彼女はわざとらしく喜んだ声を上げ、僕に「ぎゅっ」とか言つて抱きついてきた。

その拍子に何かが彼女のポケットから落ちる。

目薬だった。

全く、僕の死も安くなつたもんだ。

目薬に負けるとは。

そして二人は樹海を歩く。

最初はここから出られるか心配したが、帰り道をちゃんと覚えていた。

自殺するためにここに来たのに。

「ねーまだ、つかないの？リンちゃんつかれたあゝ。リンちゃんノドかわいたあゝ、リンちゃんオナ力すいたあゝ。リンちゃん、臨界点寸前ゝ」

「あーもう、リンちゃん、リンちゃんってウルサイよー!!」

「だってえー、リンちゃんは琴和リンっていうんだもん!!」

「別に名前なんか聞いてない!!」

「えーん、タッチがいぢめるうゝっ!!」

両手を顔で覆い、演技としか思えない泣き声をあげる。

「誰がタッチんだ!! 俺は沢村健二って言う名前がある!!」

「じゃあサワジ」

「駄目だ」

「ええーん!! サワジがいぢめるよあゝっ!!」

さらにリンの三文芝居は続く。

僕の我慢は限界に来ていた。

「うるさいよお前!!」

「ああつ、サワジ! あそこに骨骨ロックが!!」

「人の話を聞けっ! つーか、あだ名で呼ぶな!」

リンの指差した場所には人骨らしき白くて長いものが転がっていた。

間違いなく、一カ月後の僕の姿だろうな。

「ここは自殺の名所なんだ。それぐらいあつても不思議じゃないだろ」

「なんまいだあゝ、なんまいだあゝ」

するとリンは両手を合わせて念仏にもならない言葉を口にした。

こいつにも死者を敬う心があったか。

「なんまいだあゝ、何万だあゝ、10万だあゝ、高すぎるうゝ、でも買ってゝ、ぜひ買ってゝ、だいじょうぶだあゝ、だいじょうぶだあゝ」

「こんなところで不謹慎だろ！」

不謹慎って……自分で言って呆れてしまった。

ここは自殺の名所。

元々不謹慎な場所じゃないか。

馬鹿馬鹿しい。

「ねえ、サワジ。神様と仏様どっちが偉いの？ やっぱり偉い人に頼んだ方が効き目あるよね」

何の効き目だよ。

「今度は絶対、あのバッグを買ってもらうんだ！」

「お前の頭はそれだけかよ！」

「うん！！」

自信満々に言うな。

「だって死んじやったらバック買えないよ」

お前は物があればそれで良いのかよ。

くだらない。

「骨骨ロツクじゃあ、メジャーデビューできないよ」

「意味がわからん」

「ご飯も食べられないよ」

「はあ？」

「寝ることもできないよ」

「永眠してる」

「歯が磨けないよ」

「うるさいなあ」

「宿題できないよ」

「……うるさい」

「また来週できないよ」

「……っ！」

ああっ、もう、ウザい！！

矢継ぎ早なリンとのやり取りに僕はとうとう切れてしまった。

腹の底から大声で叫ぶ。

「うるさい！！ おまえ馬鹿だろ！！」

すると散々、わめいていたリンが、黙った。

不思議に思ったら、すぐにこれでもかって言うぐらいの満面の笑みで答えた。

「ばかりですっ！！！」

ほんとに気持ちよく言った。

「なっ……」

僕は言葉を失った。

何かコイツを見てるとイライラする。

そして苛立つ原因も分かっている。

おそらくコイツが臆面なく自分をバカと言えることだ。

それは決して「どうせ私なんか……」という自嘲的なバカじゃない。

自分というものを本当に分かっているバカ。

僕にはその勇気がない。「どうせ……」が取れない。

変なプライドが邪魔をする。

だから自殺しようとしたんだ。

こんなプライドを守るために……これじゃあ僕がバカみたいじゃないか。

ってか、なんでこいつに向かって僕はあんなにムキなって話したのだろう？

……そういえば久し振りに他人と会話したような気がする。

今までずっと部屋に閉じこもってたからな。

「おんぶ」

僕は仕方なくリンをおんぶした。人の重みを感じられた。後ろではリンが変な鼻歌を歌っている。

音程が微妙に外れているその歌を聞きながら、次第にモヤモヤがなくなっていく。

なんだか死ぬのが馬鹿らしい。

そうしている間に僕らは樹海を出た。

近くの駅まで行き、二人分の切符を買い、僕らは駅のベンチに座る。

僕は自殺するのを止めた。

少なくとも隣のこいつを見てるとその気もつける。

僕は彼女に感謝の言葉を言おうとした。

でも、恥ずかしいので僕は下を向きながら言った。

「あのさ、ありがとな。もしかしてお前、俺の自殺を知ってて、あんな事してくれたのか？」

そうじゃないとあんな偶然ありえない。色々なわざとらしい行動を見てるとどんどんその思いが強くなる。

僕の問いに彼女は何も答えない。

それが答えなんだろう。

僕は構わず話を続けた。とにかく気持ちを伝えよう。

素直になるんだ僕。

頑張れ、自分！

「なあ、これからお前どうするんだ？ よかったら俺と一緒に……」

そして僕は横を向いた。

だが隣には誰も居なかった。

ヒンヤリとした風が僕の頬をなでていく。

やっぱり僕を自殺させないために出てきた自殺者の幽霊なのかな。なんだか僕は胸が熱くなる。

リン、僕は……

僕は……

「ねー、リンちゃんを家まで連れてってえー」
聞き覚えのある声に後ろを振り返ってみる。
そこにはリンと見知らぬ男が立っていた。

「ええー、でも君、目の前にカレシいるだろ？」
男に言われてリンは僕の方を見る。

「あんな男、お断リン！！」

「おい……」

その時、ちょうど電車が来た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1857b/>

ではすかー

2010年10月8日15時07分発行